観て、触れて 田舎でアート旅

北遠地区の里山は、小粋な美術館やギャラリーが点在し、アートであふれている。この地に惚れこんだ数々のアーティストたちの創作拠点となっているのだ。自然界が生み出す豊かな光景も、ある意味アートの一部。五感を刺激しインスピレーションを与えてくれる何かがひそんでいるのだろうか？

イラストレーター・画家である佐藤みきさんが描いた、「月の満ちかけ絵本」の原画展の様子。教室で実際に使用されていた黒板や机を利用して、作品を展示している。

ノスタルジックな廃校が人を繋ぐアートスペースに

長野との県境、昔ながらの田舎の原風景が残る天竜区水窪町。ここにノスタルジックな雰囲気を漂わせる旧西浦小学校（2008年に廃校）がある。別名「ミナの森・にしうれ小学校」。この旧西浦小学校を拠点に、山村と都市部を繋ぐ町おこし〝ミナの森プロジェクト〟が展開されている。

地方特有の方言をモチーフにしたキャラクターを制作し、オリジナルアニメや映画の上映を行うなど、さまざまな取り組みを行ってきたミナの森プロジェクト。それらは確実に水窪町の魅力発信につながっている。

2014年4月からは、文化芸術との触れ合いを目的とした展覧会「こてんこもり」を開催（～12月まで）。県内外から集結した芸術家11人が交代で個展を開き、作品展示やワークショップを行っている。芸術家たちの手によって、木造の校舎が色とりどりの世界観に染め上げられていく様子はとても刺激的だ。豊かな自然に囲まれた空間で芸術と触れ合う貴重な体験。大人だけでなく子どもたちの感性も研ぎ澄ませてくれそうだ。

校舎内には、オリジナルキャラクターのイラストや人形を展示。すべてのキャラクター名は遠州弁からとったもの。てんこちょ、あいき、あんき、ひずるし…。「どんな意味？」は、ミナの森公式HPでチェックしてみて。

「ミナの森」とは“みんなの森”という意味。活動に賛同してくれる方々と一緒に展開していくプロジェクトであり、町おこしのためのさまざまなイベントを各地で行っている。

【こてんこもりINFO】
入場料／大人500円　フリーパスポート大人3,500円
時　間／10:00～16:00　休／月、火曜 他休日あり

〈展覧会スケジュール〉
- 8/31まで　絵描き/はと
- 9/6～28　漫画家/かまちよしろう
- 10/4～26　パフォーマンスアーティスト/Seiji Yamauchi
- 11/1～24　水墨画・墨彩画家/岡田 潤
- 11/29～12/21 版画家/佐野せいじ

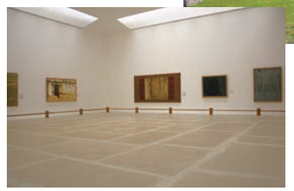
ミナの森プロジェクトの代表・津ヶ谷さんは、方言をモチーフにしたキャラクター「言子（ことこ）」のデザインを手掛けたアーティスト。水窪町に移住して10年、自然とともに生きる喜びを実感しながら、町おこしのために精力的に活動している。

ミナの森・にしうれ小学校（NPO法人ミナの森プロジェクト）
住 浜松市天竜区水窪町奥領家5296-18
問 053-987-0610　http://www.minanomori.com/

素足で感じる天然の素材感　秋野画伯の愛したインドに触れる

文化勲章受章をはじめ、世界のアート界に数々の功績を残してきた日本画家・秋野不矩（天竜区二俣出身）。画業前半は主に人物画を中心に、54歳でインドに魅せられてからは、現地の人々や神々、風景などを描いてきた。そんな秋野作品の魅力に触れられるのがこちらの美術館。館内には、インドでの作品を中心に、絵本原画などを含めた約300点以上の作品が所蔵・展示されている。建築家・藤森照信氏設計の壮観な建物には、地元の天竜杉や漆喰などの自然素材がふんだんに使用されている。履物を脱いで鑑賞するスタイルも特徴的だ。

秋野不矩「インド女性」1964年



〈所蔵品展〉
秋野芸術の精華Ⅲ ～インドの太陽
- 開催期間：10月5日(日)まで

1962年より約1年、インドのビスバ-バラティ大学の客員教授を務めた秋野不矩。インドでの生活や旅の中で、平原に沈む太陽の壮大なありさまなど、いくつもの新鮮な感動を味わった。「平原」、「インド女性」、「海辺のコッテージ」など、風景やインドの人々、ヒンズー教の神々、寺院などを描いた作品を展示。

浜松市秋野不矩美術館
住 浜松市天竜区二俣町二俣130　問 053-922-0315
時間／9:30～17:00　料金／大人300円、高校生150円、中学生以下・70歳以上・障がい者手帳所持者は無料（特別展は別途設定）
休館日／月曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）
http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/akinofuku/

田舎の創作人 Creative people

CERAMIC ART 陶芸　遠州天龍焼 剛窯（ごうがま）

斬新かつシンプルな器との出会い

船明ダムの絶景を見下ろすロケーションの中、五感を研ぎ澄ませながらロクロを回す山口剛（たけし）さん。来年、陶芸家人生30周年の節目を迎え、その作品作りにはますます熱が入る。山口さんは、広島でのサラリーマン時代を経て、九州・高取焼の先生に師事。その後、創作に適した豊かな自然環境に惹かれ、33歳でこの地に「遠州天龍焼」の工房を構えた。遠州天龍焼の最大の特徴は、独自の手法で見出した模様の付け方。自作の道具を使って斬新なデザインを加えつつ「やりすぎず、控えめすぎず」のバランスを表現する。シンプルで上品な印象の器は、同地区で育った鮨職人・小野二郎氏の次男が営む「すきやばし次郎六本木店」でも使用されているほど。ミシュランの星を獲得する銘店の料理を、さらに引き立てているのだ。

遠州天龍焼の魅力に触れたいなら、工房横にあるギャラリーへ。日用で使える食器や花器、茶器などさまざまな作品を見ることができ、その場で購入できる。予約制の陶芸体験も人気だ。澄んだ空気と雄大な自然、山口さんの匠の業が融合すれば、そこもまた極上のアートに様変わりする。

甲骨文字からインスピレーションを得た作品。スケッチから型製作まですべてを自身で行う。「一文字ごとに意味があり、デザイン＝伝えたいメッセージなんです」とのこと。

自作した道具は100種類以上。身近な日用品を改造し、模様付けに活用している。2012年「第59回日本伝統工展」で入選した作品は、時計の歯車を使って独特な点描を施した。

遠州天龍焼 剛窯 ごうがま
住 浜松市天竜区月990-9
問 053-923-0928
http://www13.ocn.ne.jp/~gohgama/

創ってみよう！
陶芸体験　5名以上～
※要予約　※詳しくはお問合せを